会話を継続するための取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校５年生までは通常通り登校していたが、コミュニケーションの課題から学級の友人と友好関係を築けず、６年生から不登校になった。

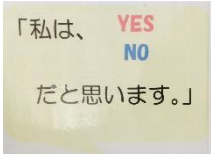
保護者は、当該生徒の意思を尊重しており、必要以上の登校刺激を行っていない。

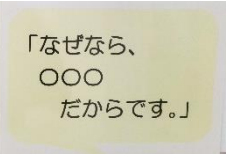
別室対応と合わせて、特別支援教室での指導を行っている。

具体的な取組

○特別支援教室の活用

小集団学習では、「自分の考えや思いを短い文章で適切に表現できる」を目標に、コミュニケーションカードやゲームを通して考えを伝え合う学習を積み重ねコミュニケーション能力を高めた。





○学級との関わりの維持

行事では、担任や支援員等から参加を促す声かけと、参加しやすい環境の提案を行った。その結果、校外学習へ参加し、学級の友人との会話もできた。また、学級以外で安心して過ごせる場の提供として、給食は空き教室で食べられるよう環境を整えた。

○不登校別室指導支援員の活用

不登校別室指導支援員は特別支援コーディネーターと月に１回程度定期的に情報交換を行っている。特別支援コーディネーターは、校内委員会で検討した内容を支援員と共有したり、別室指導での生徒の活動や変容などの報告を受けたりして、その内容を校内委員会で共有し、連携を深めている。

○個に応じた支援

校長、副校長、生活指導主任、特別支援コーディネーター、ＳＣ、ＳＳＷ、不登校対応巡回教員、各学年担当教員を構成メンバーとした校内委員会を週に１回時間割に組み込んで実施した。そして、多面的・多角的に検討することで、個に応じた学習支援を実現した。

成果

当該生徒は、修学旅行への参加をきっかけに、２学期からは教室復帰し登校できる日が多くなった。１学期の出席率は約 11%であったが、２学期は 73%に増加した。

また、一人の生徒に対して、多くの大人が関わってより良い指導や対応を実現しようという風土が校内に構築できた。

課題

教室復帰後の支援を継続することが課題である。

校内別室と教室の連携

不登校児童の状況

対象児童は、小学校１年生の２学期頃から不登校気味となったが、２学期後半に校内別室が設置されてから登校できるようになった。朝、担任に挨拶をしてからは、ほぼ校内別室で過ごしていた。２年生になると、教室で学習をする時間が増えたり、校内別室でオンライン授業を受けたりすることができるようになってきた。

具体的な取組

○充実した見守り体制

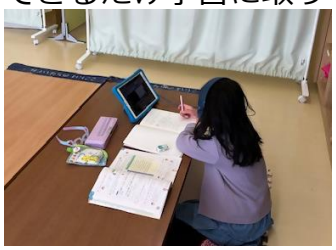
毎日１時間目から６時間目まで、２人の支援員が見守ることができるように体制を整え、部屋の中での活動の見守りや補助、教室までの行き来の付き添いなど、児童が安心して活動できるようにしている。

○心理的な安定が図れる空間の設定

フロアマットを敷いて床に座れるようにして座卓で過ごすことができたり、パーティションで区切り、一人になることができる空間をつくったりしている。また、教室の校庭側のドアからそのまま外に出られるようになっており、居心地が良い空間づくりを目指している。

○学びを止めない支援

当該児童、保護者、担任と話し合い、参加できる授業は学級で受け、オンライン授業も活用し、できるだけ学習に取り組めるようにして、学習に対する苦手意識を軽減している。



教室からの配信によるオンライン学習の様子

○他者との交流を図れる場の設定

少人数での集団生活を過ごすことで、友達との関わる楽しさを体験させたり、もめた時の折り合いのつけ方を経験させたりし、コミュニケーション能力の向上を図っている。

各学年の学習に取り組んでいる様子

成果

校内別室を利用することにより、登校できるようになった児童が増えた。不登校児童の中にはコミュニケーションが苦手な児童が多いが、少人数で過ごすことにより、コミュニケーション能力の向上を図ることができた。

課題

児童同士のトラブルへの支援や学習への意欲を高めるサポートが必要である。

登校リズムの確立と保護者との連携ついて

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校のコロナ流行時から不登校である。不安感があり教室に入ることも難しい。校内別室ができる前は保健室で学習をしていた。保護者は仕事が忙しい中、進路等の選択のために、当該生徒と見学に行っている。

具体的な取組

○校内別室の利用

当該生徒が安心して過ごせるよう、校内別室を開室し、安心して登校できる環境を整えた。

○自主学習の時間の設定

集中して学習する環境を整えた。自主学習を基本とし、校内別室指導支援員が見守っている。

○教職員との連携

登下校時は必ず、職員室へ行くように促している。教職員は温かく迎え入れ、当該生徒と必ずコミュニケーションを図っている。

○教職員と保護者の連携

定期的に保護者と面談を実施し不登校支援の方針を決めている。面談の内容は適宜校内委員会で情報の共有を行っている。

成果

中学校２年生までは欠席が目立っていたが、校内別室利用後からは、登校リズムが確立し、毎日登校できるようになった。保護者との連携も密に行い、進路実現に向けた方針を立てることができた。

課題

多くの教職員と関わりをもち、参加できる教室活動を増やしていく。

別室対応を生かした登校支援の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、「学習面」と「友達関係」について不安を抱えている。当該児童と保護者から「別室登校から始めてみたい」と希望があり、当該児童が他の児童との関わりを望んでいないこともあり、別室を設置し、居場所を提供することにした。現在、当該児童は、毎週金曜日に別室に１～２時間登校できるようになった。

具体的な取組

○校内委員会（不登校対策委員会）の充実

不登校対応教員、養護教諭、学年主任、管理職、場合によってはＳＣ、ＳＳＷにも参加を依頼して対応について検討している。

各学年からの情報・課題に対して、児童一人一人に対する支援の在り方の見直しなどを行い、教職員全体で周知を図る。

○ＩＣＴ機器の活用

朝、夕と１日１、２回担任とタブレット端末で健康状態の確認をしたり、学習の進捗状況の確認をしたりして個別の対応を行っている。

全校朝会や授業の様子をクラウドにアップし、学校や教室の様子が分かるようにしている。

○別室登校児童の居場所の提供

「他の児童との関わり」が難しい児童の居場所として、不登校担当教員を中心とし、児童の教室復帰と学習を支援する。

○小まめな連絡・家庭訪問

当該児童が欠席した場合は必ず電話連絡を行う。その際は、家庭で一日どうのように過ごしたかなどを聞き、担任とつながりをもち続けるようにしている。

担任が家庭訪問を行うことで、登校する気持ちも高まり、前向きに登校しようとする姿が見られる。

成果

校内委員会（不登校対策委員会）では、資料作成や課題把握について不登校担当教員等と情報交換が行われたことで、委員会の活性化につながった。

校内別室対応を設置したことで、登校できるようになった児童がいる。１学期は１日も登校できなかったが、２学期から１日１、２時間校内別室登校が可能になった。

課題

校内別室に通う児童に、学習への意欲をもてるように支援することが課題である。